

ていくのか。また新しい価値あるものは何か、それは工場誘致なのか、あるいは観光なのか、こういうふうなコンピニションでやっていく、しかし一番手っ取り早いのは農業プラス工業でしょうね。先ほど企画課長の方からいわれた農村の中の工業だと思えます。

この場合でどういうふうにはりつけていくかということに対して全市町村長が非常に神経をつかっていますね。しかもその基本になるのは農業の生産面においてどういう形態の農業でどれだけ所得の確保ができるというふうなものがやはり一番骨子になると思えますね。言い換えますと、いま第一次が終わって第二次の農業構造改善の過程に入っています。

この第二次構造改善が達成されれば二万五千でしたか、これが自立農家、しかし、問題は自立農家だけでは解決つきませんね。

そこにピンチヒッターとしての市町村の将来の経営からいけばいわゆる工業化というふうなことが必要となってくるわけですね。

新全国総合計画でいう全国のネットワーク、これを大型ネットワークとするならば広域市町村圏の中で整備するものはローカルネットワークである。これによって人と物との流通体系の確立を図る、そこにいまのような新しい価値感というふうなもの定着させていく、このひとことに帰するんじゃないかと思えます。

しくは熊本周辺の企業でもやはり将来は、寮のような形があらましようけれども、これはある意味では住宅なら一応別でしようけれども、寮という形はどうしても独自の傾向が強いものですからやはり一時的なものになりはしないかと思うわけです。

そこで、この際、通勤の交通網、道路を含めた交通体系を整備することによって自分の家から一時間位の距離のところならば十分往復が出来るということになれば、県内での過疎、過疎という問題もそう起らなくてすむだろうという感じがするわけです。

□ ブロックごとに 〃ミニ県計画〃を

嶋田 いま県内にも時と場合によれば過密、過疎ができる可能性があるとおっしゃったのはその通りだと思います。さきほど城野さんの方から出された広域市町村圏はどう考えていくか、これを県内に例えは十のブロックに分けてみました場合に、やはり熊本が過大都市になる可能



過疎現象の可能性が大きな悩みで……嶋田

ですから考え方は全総計画の具現であり、あるいは県計画に密着するものであり、市町村の努力目標をこの中に織り込んでいかなければいけないというふうなことになると思えます。

□ 農政の総合的展開 をどうする

常川 いまのお話で農業が人口や戸数が減っていくということ、それを全総では全国段階で五割から八割とみている。熊本の場合は先ほどお話ししました十二万五千というのは就業人口の率でいくと一六割ということになっておりますから、まだまだ全国段階に差がある数字になっているわけですね。それを自然のなりゆきでいくのか、あるいは誘導するのかがという問題ですね。これは当然県計画という形で取り組むわけで、それは当然計画的に誘導するんだ、誘導しなければならぬんだということではやはり取り組むわけですね。その場合、第二次構造改善事業にしても従来の第一次構造改善事業がいわば村ぐるみの感じがあつて、地域の農業全体を何となしによくしていこうというふうな考え方がなきにしもあらずだったわけですね。しかし、今後の構造改善事業はそういう村ぐるみといえますか、要然としたものではなくて、今後農業の中心になる自立経営をつくらせていくんだと、そういったところに焦点をおいて誘導施策としてやっていく。構造改善事業

性はあるわけですね。現時点においては、それだけに末端にある広域市町村圏というのにはむしろ過疎現象を起しはしないか、その人達にどういふふうな所得の向上なりあるいは定着ということをさせていくかということが非常に大きな悩みの種になるわけですね。

ここで伺いたいと思うのは、いわゆる広域市町村圏毎に県計画を分けてみた場合に、農業も、工業も含めて、その一ブロックごとに、そこにめざしている方向はこれですよというふうなものがでてくる、しかしこれは容易に市町村が消化できるものだろうかということ。また、それを受け取った場合には、工場の場合にはこうなる、あるいは自立農家はこの方向で育成をと、ゆうようなものが示され

だけでなく、いろんな金融制度でも、また基盤整備や大規模施設の建設など、あらゆる事業にしましてもこれからはいわゆる経営計画をたてて、そしてそれでセレクトして達成できる人達や産地に誘導していくということではなければと思っているわけですね。その誘導の可能性という可否、それが農業側だけではなかなか出来ない面があるということです。

嶋田 結局、総合農政の展開ということでしょうが、先ほどのくり返しになって恐縮ですけども、市町村長さんの側からいえば、今後の農業の行き方ということがなかなか確実にとらまえていく。そこで今後は誘導型でいくんだということと、なるべく早く誘導するということのならばやはりなるべく早く地域にあった施策というものの大綱を示す必要があるんじゃないかと思えます。

田辺 その点については三月二十日の県計画策定の席でしたか、むしろいろんな自由化あたりとの問題から関連して誘導型というよりも、どうやってその程度までで防止するか、大幅な流出が生じるのではないか、というふうな意見もありましたね。

□ 工業化と 通勤交通網の整備

城野 さきほどの家つきの労働力、そういうのをどう活用するかということ、なかなか九州の場合は東北なんかと違って

と非常に好都合だという気がしているのですがね。

城野 はじめ、各ブロック別の各論をもううたて割の格好でいこうかという考え方もあったわけですが、相互にそれぞれ、例えば一つの地域をとってみまして、そこは林業プラス農業プラス観光というのでは割り切れないといえますか、そういうようなところがあつて、なかなか難しいわけですね。けれども各論のそれぞれの分野でこの地域はどういうふうな格好でというふうなことは出来るだけわかりやすく書いたつもりです。私が出したような問題はその圏域なり、中核都市になるようなところは、それはそれなりに受け取れるという程度のは示しているんです。問題はやはりそれを各

生活条件がまだまだ余裕があるといいますが、どうしても挙家離村というふうな格好ではなかなかできにくいということがあるわけですね。むしろ県内にとどまってもらって、特に若い労働力が地域の繁栄に参加してもらい新しい世代の交代といえますか、そのところで第一次産業から第二次産業への転換をどう秩序づけていくかということだろうと思えます。

田辺 そういう意味ではやはり県計画の実施に当たっては、製造業関係、二次産業を中心に考えるならば一応県全体の大きな工業化という前提では、いわゆる不知火、有明という新産地帯、臨海工業地帯それと一部内陸部、それに熊本市を中心とした内陸工業地帯に大規模なものを振りつける。そうなる今度度はまだ県内での一種の過密過疎現象が生じるかも知れない。それでやはりある程度の人口を有するところに、今度はその地域の核になるようなものを考える必要がある。就業人口からすると三百千位の規模のものをある程度地域的に分散配置していく、そういう企業がはりつきますと今度度はまたそういうところがさらにミニ工場、小型のもの、衛星工場みたいなものを、連絡距離一時間ぐらいというふうなことでやりましますから、そういうものと大体五十キロ位までの範囲でそういうものが一つの中核的な企業から五つ十ぐらい考えられるとそういうふうなものが末端市町村の方にも伸びていくだろうと思っております。それでいまの中心になるような臨海も

◇ 大規模開発プロジェクトと基盤整備

常川 その点、先ほど工銀課長から有明不知火、あるいは熊本内陸というふうな一つの工場配置のビジョンをお伺いしましたが、農業の方でも大規模な事業、新全総でいけばいわゆる大規模開発プロジェクトというふうなものを、それぞれの地域にあげておきまして、そういう事業を推進していくことによって、その地域

が全体的に整備され、開発の方向が出てくるというふうな配置が農業あるいは工業部門だけでなく、各部門ともそういうふうな考え方が出ているようで、その辺は今回の県計画はプロジェクトが比較的明確であるという点はいんじやないかと思えます。

嶋田 全くと同感です。そういうふうなことを市町村長さん方が非常に期待しているんです。それで代表として申し上げたわけなんです。